

明珠

龍泉院
参禅会会報

〈坐禅と私・特集号〉

従容録に学ぶ (六)

第一八則 趙州狗子

〔示衆〕

衆しゆに示して云く、水上の葫蘆ころ、按著あんしやくすれば便たぢまち転ず。日中の寶石、色に定形なし。無心むしんをもつても得うべからず、有心うしんをもつても知るべからず。没量もつりやうの大人だいにん、語脈裏ごみやくりに転却てんきやくせらる。還また免れ得うる底ていありや。

〔本則〕

挙こす、僧じゆうしゆう、趙州ちゆうしゆうに問う、狗子くしにも還また仏性ぶつじやうありや。(街ちまたを攔さえぎり、塊つちくれを趁おう。)州云く、あり。(また曾かつて添そえず。)僧云く、既にありと、甚麼なんとしてか却かえつて這箇しよこの皮袋ひたいに撞入とうにゅうす

るや。(一款かんに便たぢまち招まく、自領出頭じりやうしゅつとう)。州云く、他の知しつて故ことに犯とがすがためなり。(且しばらく招ま承じやうすること莫なか、是れ你なんじを道いうにあらず。)また僧ありて問う、狗子くしにも還また仏性ありや。(二母にぼの所生しよしやうなり。)なし。(また曾かつて減げんぜず。)僧云く、一切衆生いっさいしゆじやうみ皆みなな仏性あり、狗子くし什麼なんとしてか却かえつてなし。(慈狗かんく、鷓鴣まうす子を趁おう。)州云く。伊かれに業識ごうしきのあるがためなり。

この則は、数ある公案の中でも、もっとも有名な公案の一つです。イヌに仏性があるかないかという単純な質問に対して、趙州和尚の答えがよく禅の風光をあらわしているからです。『無門関』では第一則におかれ、全四八則を貫く根幹となっているほどです。

趙州狗子



趙州とは、唐代に河北省趙州の観音院（現在の柏林寺）に住して四〇年間も禅風をふるった從諭（七七八〜八九七）のことです。かれは、百丈懷海―南泉普願―趙州という南岳系統の禅宗系譜につらなる人ですが、系統などには無関係に、独立独歩のずばぬけて大きな禅風で知られ、じつに一二〇歳の長寿を全うしたスーパーマンでした。そのために、かれの禅は世に「口唇皮禪」と評され、道元禅師も「趙州以前に趙州なし、趙州以後に趙州なし」と讃えているほどの禅匠でした。

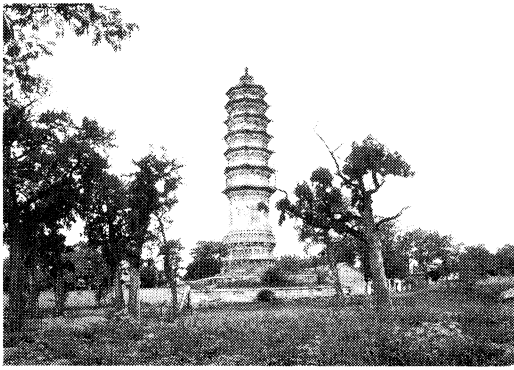
まず、本則に対して万松がくだした全体的な評価である〔示衆〕をみましょう。「水の上に浮かべたヒョウタンは、ちょうど日光に照らされた寶石の色のように、定まるところがない。同様に仏法の真理は、有心でも無心でも得られないという道理を、趙州さんが教えてくれたのだ。」といった意味です。仏法の道理や心のありかたを具体的な物事で巧みに例示する方法は、中国人の伝統的な特技ですね。

さて、「本則」で公案の問答をみましょう。

一僧が趙州に質問する。「イヌ

に仏性がありますか。」「あるよ。」「それならば、どうして四つ足をし、ワンワンいっているのですか。」「仏法のルールを破ったからじゃない。」「他の僧が趙州に問う。」「イヌに仏性がありますか。」「ないよ。」「どんな生物にも仏性があるというのに、それはなぜですか。」「迷いのためにさ。」

この公案には、二つの大きなテーマがあります。一つは、イヌの仏性に有と無、つまり肯定と否定の答えがなされること、もう一つは、イヌの姿になっているのは、仏法の道理を犯し、迷っているからだという因果業報の理がみられるこ



趙州柏林寺に現存する元代の古塔

とです。いずれも重要な問題であり、宋代に公案禅を大成した大慧宗杲が、常にこの公案を用いて参禅者を導いてから、日本の禅林でも修行者の第一に参究すべき公案とされた理由がわかります。

まず、仏性有無については、仏性は有や無をこえたものであることを体得しなければなりません。とかくわたくしたちは、「仏性」というと性にひっかかってしまい、仏性を「仏としての性質」だとか「仏になる可能性」などと理解して、人よっての存在の有無や密度の具合などを問題にしたくなります。これはまったくの誤りで、万松が「言葉の塊りを追いかけるようなもの」と評する通りです。つまり、絶対に仏性という概念が先行してはならないのです。私たちが、仏法の道理にかなった生活をする当処に、自然にそれは働いているのです。

今日、私は駅のホームに落ちていた百円玉をみつけ、すぐに駅員さんに手渡しました。自分がしたのではなく、自然に仏性がしてくれました。同じように、泣く子を母親があやすのも仏性、まちがった事をした子を父が叱るのも仏性のはたらきです。

こう理解して、改めて『正法眼

藏』仏性の巻を開くと、道元禅師のお言葉の深さには、涙がこぼれるほどの感がします。

「悉有は仏性なり」

「山河をみるは仏性をみるなり」
「仏性は覚知了にあらざるなり」

「仏性をしらんとおもはば、しるべし、時節因縁これなり」
どうでしょう。この有無などおよそ問題とならない風光を。だからこそ、趙州もある時は有、ある時は無と教えたのです。ちょうど、馬祖がある時は即心是仏、ある時は非心非仏と示したのに似ていますね。概念化するのを徹底的に嫌うのが禅の風光です。

次に、イヌとなっているのは因果業報の理、という問題です。ただ、趙州の語をくり返し味わうと、これは宿業説などが説かれるのではなく、仏法の道理をよく守り、迷わずに修行するのが禅を学ぶ者のあり方だと教えているのです。たしかに、イヌもネコも絶対的存在であり、人間をうらやむことなく、独自の世界を持っています。だから、人間の価値判断をこえた仏性が、それぞれの世界にはたらいっているのですね。自然世界みな同じです。坐禅こそは、仏性の丸だしになった時節因縁の世界です。



第五回成道会参加者一同 (S62. 12. 6)

第五回成道会行なわれる

昨年の一二月六日(日)、第五回目の成道会は、異例の初雪の中おごそかに行われました。静かに降り続く雪、寒さでピンと張りつめられた本堂、その中で椎名老師と三名の随喜僧のご指導により、当山の参禅会員三八名、他山の会員二名、合計四四名(男三五、女九)の集いでした。

行事は、差定通りに、坐禅一炷、慶讃法要、法話、記念写真、点心、反省会、の順に進められ、二千五百年前にお悟りを開かれたお釈迦さまの成道を讃えました。

なお、法話のテーマは「仏との出会い」でしたが、そのためには家庭や職場で「しみじみとした語り」の大切なことが説かれました。

(参加者)

木村誠治、宗藤幸生、青蔭孝光
(以上僧職)

高間利介、小畑節朗、富田文子、
武山喜代子、平沢満代、神戸正、
藤原公、徳山浩、三町勲、四宮清
二、高野千代子、中嶋南洲男、沢
村国勝、塩崎康之、金崎史、小島
進、小島喜子、染谷はる、染谷の

り子、八木下真司、五十嵐嗣郎、
杉浦上太郎、下村忠男、片桐亮、
武田博志、原力三郎、佐藤征志、
川上寿美子、久保田あや、久保田
定爾、中川俊二、添田昌弘、新井
ミチ子、宮澤勤、宮田哲男、加藤
健之、森岡俊雄、清水利一(以上
当山参禅会員)
西山中、村上充郎(以上柏市龍光
寺参禅会員)



外は一面の雪景色でした

〔特集・坐禅と私〕

坐禅人にとって、『坐禅と私』は、生涯、いな、永遠のテーマといえます。坐りははじめた動機、足の痛さや雑念の処理への苦悩、それをこえた大寂静の坐のすばらしさ、家庭や職場とのかわり合い等々、みな千差万別の体験と意見があるはずです。ここに、会員から寄せられた五篇の声を集めてみました。それぞれの立場や経験や性格のちがいはあっても、きっと私たちが互いに精進努力してゆくためのよき糧となることを確信して！。

坐禅と私

野田市 佐藤征志

参禅会と私のそもその出会いは、高野さんを通じて、実にスムーズにご縁をいただけた様に思います。それも高野さんに、初めてお目にかかってから、二度目か三度目くらいのおときでした。

前々から、禅にはいろいろ興味は持っておりましたが、自分から進んで門を開く程、強い意志は持っていなかったのですが、ご縁をいただけたのも、温い御仏のご意志の様な気がして、つくづく感謝いたしております。

禅を始めて、いろいろな事を感じたり考えております。

第一に感じる事は、落着いて物事を考える事でしょうか。今までは物事を断片的にしか考えられなかったのですが、大きな自然の力をお借りして、大所高所から物事を判断出来る様な気がしております。一方的にしか考えられなかったことでも、いろいろな角度や方向から考えられる様に、お陰様でだんだんやって来ました。

やはり自分中心でなく、大自然とか御仏とか時の流れとかによって判断して行く事が大切ではないかと思っております。

「うどん屋」という飲食産業の忙しい仕事を通して、毎日の生活を精一杯生き抜く生き方を、「すわる」事によって確められる様な気がするのです。座る時は無心で

す。自然のふところにとび込んで、すなおな気持で、ほんの短い時間ではあれ、御仏にほんの少しでも近づける様な気が致します。私は私なりの理解度でしかわかりませんが、ハッキリわかる事は、真から良く坐れた時は、身も心もすがすがしいものを感じるのには私だけでしようか。御仏と一緒に空間で、楽しい対話のひとつときかも知れません。

第二に感じる事は、人生に良き師に恵まれる事こそ最大の幸せであると信じておりますが、参禅会を通し御仏の道を開いてくれた方こそ椎名老師だと思います。老師を通じてお陰様で御仏の理解度が深められ、現在の様な安定した心境にもなって来られたのだと思います。

小学校より学生時代を通し、本当に恵まれた先生にお会いし、社会に出れば立派な師に感化され、一貫して人生そのものを教えていただけの師のみにお会い出来た様に思えるのです。

第一、第二の大きく多くの恩恵を受けて来た私にとってこの恩を私の為だけに使う様な事が有るならば何にも意味がない、私のまわりの方、そしてより多くの方に幸せになっていただける様にお返し

をして行かなければならない、と考えております。

お返しをする事こそ、御仏の心にそえる一番尊い道なのではないか、と理解させていただいております。極論すると、これから皆さんにお返しする為に今まで生かされているし、これから生きて行けるのではないかと思います。素晴らしきかな坐禅！

坐禅と私

松戸市 四宮清二

昨年末は仕事が忙しくて、新年には久々に同僚と酒を飲み交わしているうち遂に適量を越え、二日酔いになり二回続けて参禅出来なくなりました。今日はぜひ出席しなければと、いつもの様に八時一五分に家を出て、車に乗ろうとするとパンクしていた。予備のタイヤと取り替えようとトランクを開けようとすると、後のタイヤも空気が抜けていた。最近はタイヤの品質が良くなり減多にパンクしないのに、二本も一緒になるのはきつと誰かの悪戯だろうと思うと同時に、今日も参禅出来ない正式の理由を見つけた安堵感が頭の中を駆け抜けた。

ガソリンスタンドまでそっと車

を動かして行くと大丈夫であろうと結論をだし、修理をして寺へと急いだ。九時五分に禅場に到着し、中へ静かに入室しようと戸に手を掛けた瞬間、すでに口宣中の和尚さんの声「初心の心がまるでない……」にドキッと、心臓が止まりそうになった。

帰途、色々の事が思い浮かびました。最初どうしたら参禅会に参加できるのだろうかと思いつながら寺の庭を散歩したこと、電柱を人を救う観音さまとして信仰した人の話、等々……



△成道会風景▽ピンと張りつめた空気

のは、数日前に急ぎの用事で、今思うとたいした事ではないのですが、障害物をかまわずに踏み付けたのです。それは塩化ビニールの波板で、裏の板に釘が打ち付けられていたものと思われず。それは、長年雨風から人を守り、ついに力つき風に吹かれて道路に落ちたのかも知れないが、電柱を信仰した人のかけらほどの心があつたなら、塩化ビニールの信者にならなくとも、片つけて通るぐらいの事は出来ただろうと後悔した次第です。

凡夫には、次のように話を置き変えると理解出来ます。親が苦勞をして子供を育てる、やがてその子供は長じて一人前になり車で走っていた。何をいそいでいるのかわからないが、前方の邪魔物を踏み付けて通過していった。その物とは、長年子供を養育し疲れはてた年長いた親であった。仏性の光を当てると自然に本当の姿を見ることが出来るのに、錆びた心で見ると錆が錆をよび、本来の姿を見ることが出来ません。はたまた仏性と思っているものも、また錆びた仏性かも知れません。いやはや、仏性と称して錆びた仏性が住みついているのです。

金属はそのまま放置すると必ず

錆が出ますので、常に磨かなければなりません。同様に錆やすい我々の心も常に磨き、光り輝かさなくてはなりません。

私の仕事と坐禅

柏市 八木下真司

私と坐禅の出会い、今から四五、四六年前、まだ私が小学生低学年の頃、呉服問屋の番頭だった父親が、今でいう何かの「研修会」に参加して帰ってきた日から、狭かった我が家の壁に向って坐り、一炷の行の後、好奇心にかられる家族に坐禅の話をしたのがはじまりです。それから父は、幾日も続かずに坐禅をやめてしまいました。が、「坐禅は気持のよいものだよ」とか、「心の疲れや病いをいやすものだよ」と私に教えてくれたのを忘れず、二、三才で今の仕事を創業独立した当初、無我夢中のうちにも、時折たまらないほどの孤独感に悩まされ、思いあまって鎌倉の円覚寺に三日ほど参禅した事がはじめての体験でした。

どちらか云えば「セツカチ」「気が小さい」「ストレスのたまり易い」性格の私が、どうにか今日までまともな近い生活ができているのも、「坐る」ことのお陰と

申しても過言ではございません。私は根っからの商人で、自称「商売職人」と呼ぶほど商売以外のことは何も知らない、何もできない人間であります。にも拘らず何人かの従業員を使い、しかも猫の目のようにくるくる変る「ファッショ

ン」を手がけ、かつあまりあてにならない経済評論家の話を聞きながら、ズッシリ重い借金経営を続けていかなければならない毎日の生活は、いまだにウロウロ、オロオロ人生そのものであります。そうした中で、「坐る」事の有難さを体験できる事は、本当に幸せなことだと思えます。「正しく坐る」法からは、私ごときはまだほど遠いのですが、かような私生活と環境の騒々しさから離れ、しばしの「安静」「静寂」のなかにあって、ふと我にかえったような尊いものを感じることがございます。権名老師のお説教を聞きながら、道元禅師のはかり知れない偉大さに、ただ感嘆するばかりですが、その大偉人が「何も考えずに唯坐れ」とおっしゃっているのがとても身近に感じられるわけでございます。大聖人ですら「唯坐る」、私如き大凡愚人でも同じことができよう、というところが、又素晴らしいことだと思えます。とは申せ、事実

は「唯坐れない」難関至極、わず
か一炷の坐禅でも「足が痛い」
「邪念は走馬燈のように」
「早く鐘が鳴らないかなあ」「冬は寒
いなあ」などなどで、とてもと
てもものふがいなさです。しかしな
がら何故か参禅する日が待ち遠し
い。これは椎名老師の「誰でも、
いつでも」という広いお心のも
とに、自ら参禅しようという方々
ばかりが集う会で、会則があるわ
けでなし（会費をとって頂けない
気がねはいささかあっても）負担
を感じない、真にやすらぎのある
参禅会であるからでしょう。本当
にありがたいことだと思っております。
合掌



△成道会風景▽香語に耳を傾けて

初心忘るべからず

船橋市 加藤広之

ちょうど受験勉強のまっさい中
でした。一月の下旬ごろ、ひと月
ごとに一回、日曜日の早朝に坐禅
に出かけていた父から、

「一緒に行かないか？」

と誘われて、今まで体験したこと
がなかったので、ぜひ行ってみた
いと思ったことと、毎日の勉強や
不安で、おちつきがない自分をど
うにかできないのではないかと考え
たのです。姿勢から心まで、坐禅
の方法を父は何も教えてくれませ
んでした。だけど、おしよさんが
が親切に説明してくれたので安心
しました。

いよいよ、坐禅が始まり、無心
になることが、どんなに難かしい
ことかと強く実感しました。初め
て坐禅をしたときのきんちよう感
や勉強のことが頭に浮んで、忘れ
ようとするとおちつかなくなり、
姿勢が悪くなる。

しかし、話のなかで、「坐禅に
慣れてきた人は、初めて坐ったと
きのきんちようを思い出してやつ
てほしい」「坐禅をすれば何かい
いことがあると思っている人は、
坐禅をするしかくがない」などと

いわれて、だいぶ楽になりました。
終わってからも色々なお話をき
けて、受験勉強をすることよりも
価値あるものがとらえられたと満
足したと同時に、今までの自分を
はるかしく思いました。

そして自分は無事志望高校に合
格することができました。これは
坐禅をしたからためになったので
はなく、やはり禅の心を少して
も知ったので、気持ちの問題の上
でとても大事なことだったのです。

「初心忘るべからず。」
この言葉が一番身に試みていた
のです。

これからの高校生活はとてもし
そがしくなり、坐禅に行ける機会
も少ないと思いますが、何ごとも
初心を忘れないでがんばりたいと
思います。本当に皆さんお世話に
なりました。

坐禅と私

柏市 安本小太郎

坐禅の目安等は、只管打坐から
すれば邪道かとも思われるが、凡
夫のあさましさで、自分の坐禅が
どのような状態なのか、やはり気
になります。

そこで、禅定にあるかどうかの
一つの目安として、軽安について

記してみます。これは心所法とい
われるものの一つで、現在の心理
というところでしょうか。

「安と云うは、謂く、軽安なり、
龜重を遠離し、身心を調暢して、
堪忍するを以て性を為し、悟沈
を対治して、依を転ずるを以て
業と為す。謂く此は、能く定を障
ゆる法を伏除して、所依止をして、
安適なら令むるが故に」。

これは『成唯識論』の中で、軽
安について述べているものです。

「軽安とは、煩惱を生ずる直接
の特殊なはたらきを遠く離れて、
身心を調和し、のびのびと軽やか
にし、修行にたえられるのが本質
のはたらきであり、心が重く沈み
こんで修行にたえられず、その結
果を障えざる随煩惱（昏沈）を滅
し、因縁を転じて、自己の身心を
清浄にするのが二次的なはたらき
である。これは定を障えざるもの
をおさえ、除いて身心を安らかに
させるからである。」というよう
な意味となります。

坐禅中に呼吸が整って、身心が
軽く、のびのびとして楽に坐って
おられるときは、禅定に入った証
拠といえるのではないのでしょうか。
なぜならば、この軽安の心所は、
定中にしかないことになっていま
す。定を引く心所は「念」で、こ

れはかつて習ったことを、明らかに記憶して忘れないこととなっています。

坐禅をくり返し、くり返し、体で覚えることでしようか。また、「定」は智慧の依り所となり、仏道の修行は、戒定慧の三学といわ

模象と真竜

「希くは、それ参学の高流、久しく模象に習って、真竜を怪しむこと勿れ」

「普勧坐禅儀をたたえる」という書物の中に、模象の話が出ております。

つまり昔インドの王様が盲人を集め一匹の象を模らせましたが、彼等は自分たちの触感から、足に触ったものは、象は桶のようだし、尾をつかんだ者は帚のようだし、腹にさわったものは、太鼓のようだと云ったそうです。

我々はとかく小さな視野でのみ物事を捉えがちです。金賢姫の価値感は何だったのでしょうか。大勢の人々を不幸にし、彼女自身も不幸になり、どこに生命をかける価値があったのでしょうか。

人とのふれあいも、価値感の違い

れるとうり、禅定は欠かせない「行」でしょう。智慧により、全ての煩惱のもととなる「無明」を破ることに、只管打坐となるよう、緊張しすぎず、投げだすことなく、坐禅を続けたいと思えます。

我孫子市 新井 ミチ子

いから別れ、離れていくのではなく、価値感と価値感をぶつかりあわせ、お互いがお互いの立場に立って物を見、考え、立場をかえて見る事が大切であって、又そこから文化も生まれてくるのではないでしようか。

広い視野で物を見、考え、多くの人々が幸せになるように盡くさねばならないと思います。

各自が自分の生き方をごまかしたり妥協したりしないでいかなければならないと思います。

自然現象では、春は草芽が出、夏の盛りには青々と繁り、秋には黄色くなり冬に枯れてしまう、人の一生も又しかり、……しかし我々は、年令にかかわらず、いつまでも心の若々しさを失わず、夏の盛りに草が青々としているのと

同じに、たまたま青年であってはならないのではないでしようか。

人生の秋になっても冬になっても七、八月の暑い夏の盛りと同じように人格的な青年を目指して行きたいと思えます。

坐禅に参加されている多くの青年にお会いするたびに励まされるのであります。

「何時に於ても後悔せず」

心に残る言葉の一つですが「後悔せず」にいられたらどんなに生きごちが良いだろうと思えます。

「振り返らない人生」が可能なのでしようか、そして未来を思うとき、未来のはてに待ちうけているものを考えるとき、人は宗教を



△成道会風景▽緊張がほぐれて……

求めるようになるのではないでしようか。

「絶対的なもの」への憧れ、恐れ、そして永遠の命……暗やみの中を幼子が恐れて泣きさげぶごとく見えない物への畏敬の思いが心をかりたてるのです。

又衣をさわって本体と思わないためにも、真竜を見分ける鑑識眼を養っていかねければと思っております。

生まれて初めて坐禅に参加した時、椎名老師に坐禅の心得をお聞きし、「雑念を払い、又浮んで来た雑念を払いなさい」と云われたのをお聞きして驚きました。

何かを考える為、苦しい事、辛い事など解決法を考えるために禅を組むとばかり思っていたからです。初めての坐禅は大変緊張しました。歩き方、手の組み方、足の組み方一つ一つに力が入り外から見たら、さぞ、しゃちよこばっていたのではないでしようか。

雑念を払い又払い又々払いの連続で、その事のみ考えていたようでありました。

まだまだ先輩の皆様のお仲間入りという訳には、まいるませぬが、自分自身、手さぐりで、心の中を空っぽにして、謙虚な姿勢で、坐りたいものだと念じております。

インド旅行記 (三)

―ブッダガヤの空の下―

柏市 武田 博志

混みあった二等列車は、長時間にもかかわらず、物売りやあらゆる階層の人々の乗降で飽きることにはなかった。ホームのない駅では手を貸しあって高いステップに上がってくる。隣り合わせた人からはみかんや落花生をもらった。人



金剛宝座とボダイ樹

情味があれば、袖ふりあった仲間もなかなかいい。

ガヤー駅の改札口を抜け出ると、すぐに日本語で呼び止められ、ブッダガヤに帰るといふ車に乗せてもらう。インド陸軍の訓練基地をわきみみて、畑の中の一本道をゆくと、平原のなかにやがて白い尖塔が見えてきた。ポンコツの国産車は、その塔の下の広場に止まった。安く清潔なゲストハウスに宿をとり、すぐに大塔に向う。

異教徒に破壊されるのを恐れ、下部を土で埋めたという塔の入口は階段を下がっていく所にある。黄金の大釈迦像が暗い室内でこちらを見おろしている。裸足に床は冷たく快よい。室内を出て大塔の裏にまわると、釈尊の坐禅された場所に金剛宝座と菩提樹がある。堂内の大仏と同じ金色の小さな坐像が背中合わせに塔の内外にあること、その対比的な配置によって、奇妙な均衡や引力を感じる。塔の壁を取り去ってひとつの大きな光背の輪を私はそこに見た気がした。

駅で合った日本語の達者な青年はゴータマといって、その夜ビールをごちそうしてくれた。ひとりの若者が目の前で食事の支度をしてくれる。気になったのは、二〇歳そこそこのゴータマ君が、その若者に傲慢な態度で次々と用を言いつけることだった。友人かと尋ねると、身の廻りの世話をしてくれる人だという。血縁と職業は密接にかかり合っていて、四つのカーストばかりではなく、二千とも四千ともいわれる職業の格付がなされ、定められた身分に縛られている。都市に流出する者にも身分制は執拗について回る。

翌朝、きのうの若者が川向うの村を案内したいと迎えにきた。泳げない私は、五〇メートルはある川中と流れを見てたじろいだ。十月の乾期に入ると水は干上ってしまいうくらいだから、歩いて渡れるはずである。コブラにおびえながら足早に果樹園を通り抜け、そこから対岸をめざす。浅瀬の渡渉地点は二カ所ある。ももまで水につかかって砂地の底を確かめながらニ連禅河を渡る。

スジャータビレッジといえば通じるニトナ村の入口は青々とした稲田を抜けるあぜ道だった。犬が吠え、黒い牛がいっせいに頭を向

ニトナ村の入口



ける。子供が飛び出して挨拶をする。私も笑って合掌し、ナマステーと返す。金銭をせびらないのでほとととする。川に挟まれた村なのに数分歩いただけで、サンダルも足もすっかり乾いてしまった。ここの大気も効率のいい乾燥機同然。土づくりのかまくらのような粗末な家が細い道の両側に続けばかりで、ジュース屋どころか店らしいものは一軒もない。

中州にあるこの村の東側にももう少し深い川が並行して流れ、六キロほど先に、ふたこぶの前正覚山がみえる。あの山から釈尊が苦行にやせこけ汚れた体を引きずる

ようにして野や川を越え、菩提樹の下に身を横たえた。通りかかった村の娘スジャータが乳がゆをここで与えたのかと思うと、胸はつまり、目頭が熱くなった。

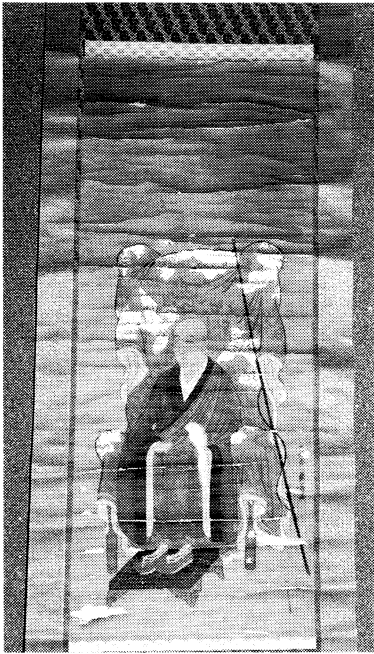
放牧された牛が廃墟のまわりで草をはんでいる。ここから眺める前正覚山と反対側の大塔との距離をはっきり私の眼がとらえている。積尊の目にした光景を共有している。人氣のないのどかな原っぱでじっとしていると、時は止まった。葉の乾いた匂いのなかで、シタールやタブラー（太鼓）の音がどこからともなく聞こえてくる。

ニーナ村が静かに熱風にさらされていくこの時に、大塔のそばでは数少ない観光客に商人が群がっているはずだ。ブツガガヤが成道の地となつて、村古来の産業を継承している者と観光客自当に集まつてきた商人との反目が表面化して小さな事件がよく起こる。信仰深く質素な村の生活者が働くそばで、客と商人との間で庶民は手にしたことのない札束が飛び交う。それを見ていて、なんとも悲しい光景だ。冬にはこの小さな村に不釣り合な多くの観光客が押し寄せる。閑散とした夏期に訪れた私にとって、この事実が気がかりなことだった。積尊の足どりを辿った旅行は病

気や切符の入手難などで入滅の地・クシナガルは訪ねられなかった。

二五〇〇年を隔てて積尊在世時の状況を思い推るといふのは思い込みでしかない。しかし、人の生活振りを見つめていると、時間という座標軸が失せてしまう。はっとして歩き出せば物乞いに囲まれる。差し出される手に私のする喜捨の意味は自己再生の為のヒンドウ教のものとは違っている。施し一つとっても常に自分への問いかけである。異文化の中で自己への内向は加速度を増した旅となった。

三回に亘って、リュック姿の旅日記を掲載していただきました。積尊が生涯を送ったインドという国、その風土や人の姿をわずかでも伝えられれば嬉しく思います。



龍泉院に所蔵される
道元禪師の頂相

道元禪師のおことば抄

学道の最要は坐禅これ第一なり。大宋の人、多く得道すること、みな坐禅のちからなり。一問不通にて無才愚痴の人も、坐禅をもはらすれば、その禅定の功によりて、多年の久学聰明の人にも勝るなり。しかあれば学人は只管打坐して、他を管することなかれ。仏祖の道はただ坐禅なり。多事に順ずべからず。

（正法眼藏隨聞記）

聰明を先と為さず、学解を先と為さず、心意識を先と為さず、向來すべてこれを用いず、身心を調べて以て仏道に入るなり。

（学道用心集）

各行事のご案内

○大雄山一泊参禅の集い

期日 六月四日(土)～五日(日)
場所 大雄山最乗寺(神奈川県南足柄郡大雄町)

交通 龍泉院よりバスで往復

○龍泉院大施餓鬼会

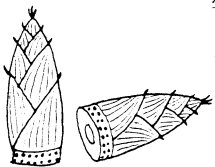
日時 八月一六日(火)午後一時
説教 中野東禅老師(予定)
法要 新盆・山門施餓鬼

○龍泉院第六回成道会

日時 一二月四日(日)午前九時
内容 坐禅・法要・法話・点心

以上、三つの行事をご案内します。会員の皆さまのふるってご参加のほどをお待ちしています。

なお、七月の定例参禅会は、椎名老師が学会に出席されるため、第五日曜の七月三一日に変更いたしますのでご注意下さい。



龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと。）
- 一、坐禅 止 静 鐘 三声 坐禅
經 行 鐘 二声 經行
放 禅 鐘 一声 放禅
- 一、講義 木版三通 開經偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聞く
講師 龍泉院住職椎名宏雄老師
昭和六三年三月より「心不可得」の巻を提唱中
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散
- 一、参加資格 年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。
- 一、会費 無 料
- 一、成道会坐禅 月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は一二月四日）
釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（ ）内は座談の司会者

- 六二年 司会者
- 一月二五日 二六名 (清水利一)
- 千葉県曹洞宗青年会二〇周年記念因脈会 一月一四日 九名 於千葉市海蔵寺
- 一月二二日 二三名 (沢村国勝)
- 第五回成道会 一月六日 四四名
- 成道会幹事 中畠南洲男
五十嵐嗣郎
写真 徳山 浩
- 二月二七日 一九名 (小畑節朗)
- 六三年 一三三名 (中畠南洲男)
- 一月二四日 二六名 (石井 勇)
- 千葉県曹洞宗青年会第九回大撰心会 三月四・五・六日 二名 於八千代市長福寺
- 三月二七日 二八名 (染谷はる)

▼六三年三月より『正法眼蔵』の講義は、「山水経」が終了し、

「心不可得」巻の提唱となりまして、

参禅の皆様から原稿をいただき、期せずして「坐禅と私」の題が多く、「坐禅と私」特集といえました。年輩の方から高校新入生となったばかりの若者まで、真摯に坐禅に取組まれる姿に心が洗われる思いがいたします。

▼第五回成道会は昨年二月七日、僧俗四四名の参加を得て盛会裏に円成いたしました。沢山の方々より祝賀を賜り、特に龍泉院老師より傘松道詠を讃えた大山興隆著『草の葉』、会員の平沢満代さんより、自身で作られた名物製菓の「数珠入れ」を全員に記念として賜りました。厚く御礼申し上げます。

▼現代の交通機関の発達は、既成の思いも思い入れも、時には壊してしまふ。数十年前の佛跡巡拝などは、大きな決意で行ったものであろう。たしかに、なんとか行こうとする意志さえあれば、私でも行けそうである。しかし、世尊在世を今の世に引き戻して渴仰礼拝する時を、いったい私自身持ち得るであろうか。―ブッダカヤの空の下―を読んでの思いであります。

(節光記)

●発行 行/天徳山龍泉院 千葉県沼南町泉81 ☎0471(91)1609
●印刷 刷/岡田印刷 六社 柏市高田1116-45 ☎0471(43)3131